

本会顧問 原随園先生を悼む



京都大学名誉教授文学博士原随園先生には、去る三月十九日芽出度く卒寿の誕生日を迎えられたにも拘らず、旬日を経ずして同二十五日逝去せられた。天寿を完うされたとはいえ、一大支柱を失ったわれわれの哀惜の念には洵に堪えがたいものがある。

先生は名古屋市の御出身、愛知一中、八高を経て東京帝国大学文科大学史学科（以下も学制改革まで何れも旧制）を卒業後、早稲田大学、姫路高校、東北帝大法文学部に教鞭をとられ、京都帝大文学部に助教として着任せられたのは昭和五年のことであった。爾来学位を得られると同時に教授に昇任、時野谷常三郎先生と相協力して西洋史研究室の再建、充実に献身されるとともに、昭和三年停年退官されるまでの永き間には、再度に互る文学部長、附属図書館長、評議員などの要職を歴任され、旧制・新制に

跨って京都大学の為多大の貢献をされた。また同大学より名誉教授の称号を授与されてのち、引きつづき立命館大学教授に迎えられ、同文学部西洋史研究室の創設に参画、その拡充発展に尽して同四四年まで在職された。

先生はまた、史学研究会、日本西洋史学会、西洋史読書会その他の学会の発展や創設に寄与されたほか、第一期の日本学術会議の会員にも選出され、史学界は素より大学行政、学術の振興に多大の足跡を残されたことは周知のことである。

然し、何にもまして敬慕してやまない原先生は、わが国西洋史、殊にギリシア史研究の傾学としての原先生である。今手許にある先生の業績を拝見して、今更ながらその著書、邦訳、論文の余りに多きに唯々驚嘆せざるをえない有様であり、特に私如きに果してその真価をどこまで理解しうるか極めて疑問ながら、敢えてそのうち特に挙ぐべきものとすれば、先ずギリシア古典史料に沈潜して独自の学風を樹立されようとした数々の論文の集大成『ギリシア史研究』第一、第二、第三、及び晩年の大著『ギリシア史研究余滴』の四巻であろう。

先生の学風を一口でいえば、従来の政治史より脱却した文化史というべきものであるが、内外の先学、特に早稲田時代非常に私淑されたと後年述懐された津田左右吉博士の影響が生涯を通じて窺われ、それは西洋史概説としては極めてユニークで格調高い『新義西洋史』に凝集されているようにも思われる。先生はまた、研究への意欲、情熱を最後までも続けて倦まれることはなかった。マケドニア国王フィリップスに対する強い共感がうかがわれる『アレクサンドロス大王の父』の出版は昭和四九年、更に先に

あげた『ギリシア史研究余滴』のそれが同五一一年であることを思えば、先生は傘寿を過ぎてな^お慶^び慶^び。而もギリシア史の真髓になお深く広く迫ろうとされ続けた不屈の学究精神には、唯々畏敬の念禁じ難いばかりか、特に一昨年秋の西洋史読書会五〇周年記念大会への病軀をおしての御出席には、只管深い感動を覚えるのみであった。

学究のあるべき姿を身をもって最後まで示された先生が、直腸癌のため大阪成人病センターに入院されたのは一昨年秋のことであるが、手術も無事終えられて経過は順調、退院後は名古屋の御生家へ移られ、女医の姪御さんの手厚い看護のもと、ずっとお元氣のようにお見受けしていた。然し、傷みを訴えられ、食欲も劣え、点滴と注射の日々を送られるようになったとお報せを姪御さんから受けたのは今年に入ってからである。それでも、少し御氣分のいい時は、酒を三口ばかりに口にされたとも記されてあった。

思うに、先生は酒を飲まれるというよりは、寧ろ良く嗜まれた方で、興いたれば、先々代左団次、先代吉右衛門らの声色を披露、江戸歌舞伎を懐しく偲ばれることも屢々だったお姿が今でも鮮かに想い出される。先生は歌舞伎に伴う音曲、清元、長唄にも通ぜられたし、謡曲、能、狂言の造詣も深く、自らも謡って陶然とさされていたこともある。囲碁、将棋を好み、東京落語を愛し下町情緒に浸られたこともあったことは、時折名人上手といわれた人々の芸談、エピソードを楽しそうに話されたことによっても窺われる。先生はこのように多趣味な方であり、広く日本の文化、特に古典的なものに深い理解と愛着をもたれた。そしてそのことと、

先生の学風とは決して無関係ではないと思われてならない。

戦後歴史研究は、恵まれた条件のもと、洵に一分の隙間もないほど手堅く、原史料にあたってオーソドックスであり、われわれが安心して読める業績が続々と発表されている。先生の業績に何かしらそこに若干の相違が見受けられるとすれば、前者はいよいよ分化していく専門に深く閉じこもって緻密、その限りでは危ないが、冷徹さを免れがたいのに対し、先生には視野の広さ、文化的素養の深さ、趣味の豊かさがおのずから行間に滲み出で、兎もすれば精密さに欠けるかの如く思わしめる処なきにしも非ずとはいえ、よく熟読含味すれば、その奥に秘められた多数の史料の裏づけと理解の深さが知られ、文脈にも余裕と温かさが感ぜられてならない今日此頃である。先生は矢張り、いわゆる明治の風格を洗練してもたれた偉大な歴史家であったが、わが国からまた一人そのような著者が亡くなられたことは、何としても寂しく恨しくさえもある。

先生を病床にお見舞した際、私は、早く全快されれば文楽へでも御案内しましょうと力づけ、お慰めたこともあったが、国立文楽劇場が竣工して、「義経千本桜」の通しが柿落しとして華々しく上演されている大阪に住む者にとって、今年は春愁の感また一入である。

紅椿落ちたる苔の青さかな

先生の戒名は、まこと先生の御生涯に相応しく「遊華院釈隨園」。今はただ謹んで心から御冥福を祈る許りである。

(西井克己記)